

【や】 柳の下にいつもどじょうはいない 次へ向けて経験を活かす

災害は繰り返されますし、周期性を持っているものもありますが、全く同じものが発生することはありません。先人の経験も大切ですが、それを活かすことに加えて、応用力を持つことも大事なことです。災害をかわすと同時に、被害を大きくしない暮らし方も大事な防災です。災害が発生しそうだというときには、先読みをして対応するというのがベストです。それが避難のタイミングであったり、避難の方法であったり、支援の仕方だったりします。避難で気を付けなければならないのは、二次災害を起こさないこと、そのためには避難場所の確保や避難ルートを平時から考えて、現地を確認しておくことが大事です。そして、避難した後の帰宅についても、どのような判断がなされるべきかは、地域でも話し合っておいてほしいものです。経験に加えて、新しい情報や知恵や工夫を重ねていくことが防災であるということだと思えます。

【ま】 末端は、なんでも、どこでもつらくて厳しい

なにごとに、裾というか端っこがあります。山裾、沢の出口、河川の海岸に近い低平地、地すべり地の末端部は、特に自然現象や人工改変といった変化に敏感なところです。魚で言えば尾びれのところかもしれません。

山裾はがけや斜面となっていて、大雨の時などには滑ったり崩壊するところでもあります。沢の出口は土石流が発生すれば、拡大するところに当たります。海岸のデルタ地帯は、軟弱地盤になっていることが多く、利用するにはコストがかかる土地でもあります。地すべり地の末端は、いわばすべりを止めている部位でもあり、不用意に工事などで除去したりすると、一気に背後の山がすべり始めることにもなります。逆にすべりそうなところでは、土塊や岩塊を裾部に盛土をすることで抑制する押さえ盛土を行うこともあります。また、造成地の末端は、地震などがあると変状が発現することが少なくありません。

【け】 建築物の危険度判定で二次災害を防ぐ

大規模な災害などで大きな被害を受けて、だれが見ても危険で住み続けることができないものは別にして、一般の方が判断しかねる或いはなんでもないような家屋であっても、専門家による危険度診断は必要です。家屋、土地、裏山などに限りませんが、怖いのは被害のさらなる拡散、つまり二次災害です。東日本大震災時でも、被害を受けた家屋に住み続けて、余震によって危うく犠牲になりかけた例があります。二次災害といえば、他には爆発物や有害物質の漏出、急な避難生活による健康の悪化、感染症への対策、帰宅困難者への対策など、多くの課題が噴出してくるのも災害の姿でもあります。